

少年柔道教室に対する期待と課題：東北地区における報告

川戸 湧也 南條 充寿 南條 和恵

学会等報告

少年柔道教室に対する期待と課題：東北地区における報告

川戸 湧也 南條 充寿 南條 和恵

Yuya Kawato, Mitsutoshi Nanjo, Kazue Nanjo : The Expects and Issues for Junior Judo Club:
Report of Tohoku Area : Bulletin of Sendai University, 50 (1) : 11-16, September, 2018.

Key words : Consumers' Behavior, Commitment, Sports promotion
キーワード : 運動者行動, コミットメント, スポーツ振興

I. 序論

今日、スポーツは人々の生活に欠かせないものになっている。オリンピックなどのメガ・スポーツイベントに多くの人々が関心を寄せ、また日常では、ランニングや少年サッカー、少年野球などを行う人も増えている（柳沢，2017）。現代では、老若男女問わず、スポーツは多様な形で人々の生活の中に取り込まれていることは、疑う余地のない事実であるといえよう。また、スポーツ基本法によって“スポーツ権”が明文化されたこともスポーツが全ての人の生活に浸透している証左ではないだろうか。

スポーツには、様々な価値があることは多くの人が認識しているところである。友添は、「スポーツを通して、喪失と獲得、競争と共同、共存と敵対、苦悩と幸福、勝利と敗北、屈辱と向上、傲慢と失脚などの実人生で経験すべきことを集約的に経験できる宝庫である」（友添，2017，p.10）と述べている。また、体育・スポーツにおける学びについて、上野は、「体の使い方や動き方といった要素還元主義的なものではなく、言葉になりにくいイメージをそのまま学ぶ回路を開き、論理的思考を超えたイメージによる思考を促す」（上野，2012，p.100）としている。ここに示したとおり、スポーツは単なる娯

楽や余暇活動にとどまらない。スポーツの教育的な側面についても、すべての人々が享受できるようにする必要がある。特に、子どもたちにとっては、心身の健全な発育発達や、社会性の向上といったわが国が抱える今日的な課題を解決するためにも子どもたちの積極的なスポーツ行動は支援していく必要がある。

仙台大学では、かねてから様々な形で子どもたちのスポーツ行動の支援をおこなってきた。「仙台大学柔道塾（以下、柔道塾）」もその一環である。開塾以降、多くの子どもに柔道の機会を提供してきた柔道塾であるが、近年は、毎週の活動以外にも合同練習会の開催など、東北地区全体の柔道振興に努めてきた。しかしながら、わが国全体を見渡すと、柔道の競技人口は減少傾向にある。特に、中学生や小学生において、2003年には中学生が51,277名、小学生が48,358名であったが、2017年には中学生が32,954名、小学生が35,613名であった（全日本柔道連盟，ONLINE）。いずれも、およそ30%の減少であった。競技人口減少の背景には、人口減少やそれに伴う道場の減少、柔道に対するネガティブなイメージなどが考えられる。

すでに述べてきたとおり、スポーツがもつ様々な価値をすべての人々が享受できるように、スポーツ環境を整えられなければならない。

そのためには、主体となる子どもおよびの保護者ニーズと指導の成果と課題を正確に把握し、運営方法ならびに指導方法を見直すことが重要である。そこで、これまで少年柔道教室を対象として行われた研究を概観してみた。CiNiiを用いて、「少年柔道」をキーワードとして検索をしたところ、44件の論説がみつかった。そのほとんどは、競技分析研究（清野, 2011; 清野, 2012）や指導法の研究（尾形ほか, 2005; 野瀬ほか 2008; 山崎ほか, 2009）であり、保護者ならびに子どもが柔道教室に対して何を求めているか、あるいは柔道教室に参加することで何を得られたかといった研究は少数であった。すなわち、少年柔道教室へのニーズならびに指導の成果と課題について検討した研究の蓄積はほとんどないといえる。

そこで本研究では、少年柔道教室に参加する保護者と子どもを対象に、それぞれが柔道教室に求める期待ならびに参加して得られた成果と課題について、質問紙調査を用いて明らかにし、少年柔道教室の運営方法と指導方法を見直す際に資する情報を提示することを目的とした。

II. 方法

1. 対象

本研究の対象は、仙台大学で平成 29 年 12 月 17 日（日）に開催された「東北ブロック育成会」に参加した柔道スポーツ少年団に参加する小・中学生とその保護者とした。受付時に質問紙を配布し、練習終了後に回収した。その結果、子ども 160 名分、保護者 45 名分の質問紙を回収することができた。いずれの回答も全ての項目に回答が記されていたため、子ども 160 名分（有効回答率: 100%）、保護者 45 名分（有効回答率: 100%）を本研究の対象として扱うこととした。

なお、質問紙は回答者の個人情報保護のため、氏名ならびに所属から個人を特定できないよう、無記名で実施した。

2. 調査内容

本研究では、質問紙調査を実施した。質問紙は、柔道を専門とする大学教員 2 名が協議の上、

作成した。調査項目は、①柔道教室に参加して得られた成果、②柔道教室に参加する上での課題、③少年柔道教室に期待すること、④柔道継続意思、の 4 観点であった。いずれの観点について、子どもと保護者それぞれに同様の質問を実施した。①柔道教室に参加して得られた成果について、「体力・技術」、「挨拶・礼儀」、「試合で勝つこと」、「忍耐力」、「丈夫な体」、「コミュニケーション力」、「その他」、の 7 項目から上限を 2 つとして回答を求めた。②柔道教室に参加する上での課題について、「柔道が難しい」、「勉強との両立が困難」、「お金がかかる」、「道場が遠い」、「道場での人間関係」、「面白くない」、「先生が怖い」、「怪我が心配」、「特にない」、「その他」、の 10 項目から複数回答可として回答を求めた。③少年柔道教室に期待することについて、「①柔道教室に参加して得られた成果」と同様に、「体力・技術」、「挨拶・礼儀」、「試合で勝つこと」、「忍耐力」、「丈夫な体」、「コミュニケーション力」、「その他」、の 7 項目から上限を 2 つとして回答を求めた。④柔道継続希望の有無について、「小学生まで」、「中学生まで」、「高校生まで」、「大学生まで」、「社会人以降」、の 5 項目からひとつ選択して回答を求めた。

3. 分析方法

本研究では、子どもと保護者それぞれからデータを収集したが、各観点における回答のうち、どの回答が最も多いかを分析するために適合度の検定を用いて検討した。有意水準は 5% 未満と設定した。なお、検定は Microsoft Excel を用いて実施した。

III. 結果と考察

1. 柔道に対する意識

1) 少年柔道教室に参加して得られた成果

少年柔道教室に参加して得られた成果は表 1 に示す通りであった。最も多かった項目は、「挨拶・礼儀」で、82 (26.4%) であった。続いて、「体力・技術」が 72 (23.2%)、「忍耐力・精神力」が 57 (18.3%) であった。このうち、「挨拶・礼儀」と「体力・技術」との回答は、「忍

少年柔道教室に対する期待と課題

耐力・精神力」を除く他の項目よりも有意に多かった。一方で最も少なかった項目は「コミュニケーション力」で28(9.0%)であった。

これに対して、少年柔道教室に子どもを参加させている保護者が感じている成果は表2に示す通りであった。最も多かった回答は「コミュニケーション力」で、20(22.5%)であった。続いて、「挨拶・礼儀」が19(21.3%)、体力・技術が17(19.1%)であった。各項目の分布について検討したところ「その他」は他の項目よりも有意に少なかった。

「挨拶・礼儀」として礼や礼法を指導することは、柔道のみならず武道においては重要視されている。中村によると、礼とは、「人間関係をスムーズにするために考え出された知恵」(中村, 2007, p.123)と述べている。相手の存在が前提となる武道においては、相手を尊重し肯定することが求められているのである(中村, 2007)。家庭や学校など日常生活では学ぶことが困難な価値観であることが推察され、柔道教室に参加して得られた成果として捉えられていると考えられる。

表1 少年柔道教室に参加して得られた成果(子ども n=160)

	体力・技術	あいさつ・礼儀	試合で勝つこと	忍耐力	丈夫なからだ	コミュニケーション力	その他	$\chi^2(df=6)$	p
観察度数	72 23.2%	82 26.4%	31 10.0%	57 18.3%	41 13.2%	28 9.0%	0 0.0%	12.6 *	.000

表2 少年柔道教室に参加して得られた成果(保護者 n=45)

	体力・技術	あいさつ・礼儀	試合で勝つこと	忍耐力	丈夫なからだ	コミュニケーション力	その他	$\chi^2(df=6)$	p
観察度数	17 19.1%	19 21.3%	4 4.5%	12 13.5%	16 18.0%	20 22.5%	1 1.1%	12.6 *	.000

2) 柔道教室に参加する上での課題

柔道教室に参加する上での課題は表3に示す通りであった。最も多かった回答は、「特にない」で、69(30.5%)であった。続いて「勉強との両立が困難」が55(24.3%)、「怪我が心配」が29(12.8%)であった。「特にない」という回答は、次点である「勉強との両立が困難」を除いて、ほかの項目よりも有意に多かった。

これに対して子どもを柔道教室に参加させる上での課題は表4に示す通りであった。最も多かった回答は、「特にない」で22(41.5%)であった。続いて、「勉強との両立が困難」が9(17.0%)、「怪我が心配」が7(13.2%)であった。

この結果から、子ども・保護者ともに、現在のスポーツ活動に対して概ね満足していること

が示唆された。しかし、この結果を批判的に捉えれば、現状のスポーツ活動に対して受動的で、自主的な参加ができていないと考えることができる。ここでの回答をもとに、対象者の運動者行動を考えると、対象者らは柔道教室という「場」に対して接近行動をとっていることが示されたが、スポーツ活動自律的に参加しているのか他律的に参加しているかどうかは明らかにすることができなかった。永田(2017)は、スポーツは自己目的的な活動であり、体育・スポーツ経営学では運動者の自律性・自主性を育むことが重要な課題であると述べている。今後は、少年柔道教室に参加する子ども・保護者の運動者行動について深く検討する必要があると示された。

表3 少年柔道教室に参加する上での課題(子ども n=160)

	柔道が難しい	勉強との両立が困難	お金がかかる	道場が遠い	道場での人間関係	面白くない	先生が怖い	怪我が心配	親が厳しい	特にない	その他	$\chi^2(df=10)$	p
観察度数	22 9.7%	55 24.3%	5 2.2%	9 4.0%	5 2.2%	7 3.1%	12 5.3%	29 12.8%	12 5.3%	69 30.5%	1 0.4%	18.3 *	.000

表4 少年柔道教室に参加する上での課題(保護者 n=45)

	柔道が難しい	勉強との両立が困難	お金がかかる	道場が遠い	道場での人間関係	面白くない	先生が怖い	怪我が心配	親が厳しい	特にない	その他	$\chi^2(df=10)$	p
観察度数	3 5.7%	9 17.0%	5 9.4%	5 9.4%	1 1.9%	0 0.0%	0 0.0%	7 13.2%	0 0.0%	22 41.5%	1 1.9%	18.3 *	.000

3) 少年柔道教室に対する期待

少年柔道教室に対する子どもの期待は表5に示す通りであった。最も多かった回答は、「体力・技術」で、106（36.8%）であった。続いて、「挨拶・礼儀」が65（22.6%）、「試合で勝つこと」が38（13.2%）であった。特に「体力・技術」は他のすべての項目と比べて有意に多い結果であった。

これに対して、少年柔道教室に対する保護者の期待は表6に示す通りであった。最も多かった回答は「挨拶・礼儀」で、36（40.9%）であった。続いて「忍耐力・精神力」が29（33.0%）、「コミュニケーション力」が11（12.5%）であった。「挨拶・礼儀」について、「忍耐力・精神力」

を除くすべての項目よりも有意に多かった。

子どもの結果をみると、上位2つの項目は子どもが成果と感じている項目と一致していた。すなわち、子どもが少年柔道教室に期待することと、成果と感じていることの整合性が図れているということが示された。一方で、子どもと保護者の回答と比較すると、子どもは「体力・技術」を高めて「試合で勝つこと」を期待して柔道に取り組んでいるが、保護者は「挨拶・礼儀」を十分に行うことができる「コミュニケーション力」の獲得を期待していると推察できる。いずれも柔道を手段的に行なっているが、期待については、子どもと保護者の間で相違があることが示された。

表5 少年柔道教室に対する期待（子ども n=160）

	体力・技術	あいさつ・礼儀	試合で勝つこと	忍耐力	丈夫なからだ	コミュニケーション力	その他	$\chi^2(df=6)$	p
観察度数	106 36.8%	65 22.6%	38 13.2%	37 12.8%	33 11.5%	6 2.1%	3 1.0%	12.6 *	.000

表6 少年柔道教室に対する期待（保護者 n=45）

	体力・技術	あいさつ・礼儀	試合で勝つこと	忍耐力	丈夫なからだ	コミュニケーション力	その他	$\chi^2(df=6)$	p
観察度数	2 2.3%	36 40.9%	0 0.0%	29 33.0%	8 9.1%	11 12.5%	2 2.3%	12.6 *	.000

4) 柔道の継続意思

子どもと保護者の柔道継続意思は表7に示す通りであった。社会人以降も継続して柔道が続けていきたいという回答が子ども・保護者ともに最も多く、それぞれ53名（33.1%）と31（68.9%）であった。少年柔道教室に参加する子どもも保護者も、生涯にわたって継続的に柔道に取り組んでいきたいと考えていることが示

された。

序論で述べた通り、現代では、老若男女問わず、スポーツは多様な形で人々の生活の中に取り込まれているが（柳沢, 2017）、本研究の対象においては、柔道に対するコミットメントが高いことが推察され、生涯にわたって柔道と関わっていきたいという意思が示される結果となった。

表7 柔道の継続意思

	子ども(n=160)		保護者(n=45)	
小学生まで	7	4.4%	0	0.0%
中学生まで	46	28.8%	4	8.9%
高校生まで	41	25.6%	8	17.8%
大学生まで	13	8.1%	2	4.4%
社会人以降	53	33.1%	31	68.9%

IV. 結論

本研究の目的は、少年柔道教室に参加する保護者と子どもを対象に質問紙調査を実施することによって、少年柔道教室の成果と課題について検討し、よりよい運営に資する情報を提示することであった。

本研究の対象は、仙台大学において開催された「東北ブロック育成会」に参加した、柔道スポーツ少年団に参加した小学生および中学生160名と、その保護者45名であった。質問紙調査では、①柔道教室に参加して得られた成果、②柔道教室に参加する上での課題、③少年柔道教室に期待すること、④柔道継続意思、の4観点を調査した。なお質問紙には、無記名で回答を求めた。

①少年柔道教室に参加して得られた成果について、子どもの回答では、「挨拶・礼儀」82(26.4%)、「体力・技術」72(23.2%)、「忍耐力・精神力」57(18.3%)の順で多かった。保護者の回答では、「コミュニケーション力」20(22.5%)、「挨拶・礼儀」19(21.3%)、体力・技術17(19.1%)の順で多かった。②柔道教室に参加する上での課題について、子どもの回答では、「特にない」69(30.5%)、「勉強との両立が困難」55(24.3%)、「怪我が心配」29(12.8%)の順で多かった。保護者の回答では、「特にない」22(41.5%)、「勉強との両立が困難」9(17.0%)、「怪我が心配」が7(13.2%)の順で多かった。③少年柔道教室に期待することについて、子どもの回答では、「体力・技術」106(36.8%)、「挨拶・礼儀」65(22.6%)、「試合で勝つこと」38(13.2%)であった。保護者の回答では、「挨拶・礼儀」36(40.9%)、「忍耐力・精神力」29(33.0%)、「コミュニケーション力」11(12.5%)の順で多かった。④柔道継続意思については、子ども・保護者ともに「社会人以降」が最も多かった。

本研究の結果から、少年柔道教室に参加する子ども・保護者ともに、成果としては、他者との関わり合いに関する事柄を挙げており、柔道を通して他者と関わり合えることを成果として認識していることが示された。また、子ども・保護者ともに概ね現状に満足をしてスポーツ活

動に参加していることが示唆された。さらに社会人以降も柔道を継続したい・継続してほしいと考えていることも示され、少年柔道教室に参加している子ども・保護者は柔道に対するコミットメントは高いと推察できた。最後に、少年柔道教室に参加する子供は「体力・技術」を高めて「試合に勝つこと」を期待して参加しているが、保護者は「挨拶・礼儀」が十分できる「コミュニケーション力」を獲得することを期待しており、その点で両者の期待の間に相違があった。ただし、いずれの期待についても柔道に取り組む中で答えることは可能であると考えられる。

今後の課題としては、実際に指導を担っている指導者からも情報を収集して、より詳細に少年柔道教室の実態を明らかにし、よりよい運営に資する情報を提示していきたい。

文献

- 1) 永田秀隆(2017) 運動者と運動者行動. 体育・スポーツ経営学, pp28-31, 大修館書店.
- 2) 中村民雄(2007) 武道の身体技法. 今, なぜ武道か, pp123-126, 日本武道館.
- 3) 野瀬英豪・野瀬清喜・板垣耕太・金丸雄介(2008) 少年柔道の指導法及び普及に関する実践的研究 - 「さいたま KIDS 柔道」を通して -. 埼玉大学紀要教育学部, 57(1), pp39-49.
- 4) 尾形敬史・風間美佳(2005) 少年柔道の指導に関する一考察. 茨城大学教育実践研究, (24), pp179-192.
- 5) 清野國安(2011) 少年柔道における競技分析. 函館工業高等専門学校紀要, 45, 59-64.
- 6) 清野國安(2012) 小学生の柔道競技分析 - 北海道少年柔道大会を事例として -. 函館工業高等専門学校紀要, 46, pp39-46.
- 7) 友添秀則(2017) 大学スポーツの価値をめぐって. 現代スポーツ評論, 36, p10, 創文企画.
- 8) 上野裕一(2012) 体育—視点の二重化—. 周辺教科の逆襲, p100, 叢文社.
- 9) 山崎俊輔・永木耕介・岡田修一(2009) 現代的少年柔道の指導方法についての提言(その1) 幼年期～小学生(思春期前)までの年代の指導方法. スポーツ・健康科学教育研究センター論集, 17, pp41-47.

- 10) 柳沢和雄(2017)スポーツの可能性と課題, 体育・スポーツ経営学, pp2-5, 大修館書店.
- 11) 全日本柔道連盟 (ONLINE) 登録人口の推移について, 登録人口推移ならびに平成 29 年度区分別会員登録者数について,
- <http://www.judo.or.jp/wp-content/uploads/2017/12/touroku-jinkou2018.pdf> (参照: 2018/05/10).
- (2018年 5月16日受付)
(2018年 7月3日受理)

